

舞姫というタイトルの意味

舞姫とタイトルがついているが、舞姫という言葉はあまり出てきていないし、職業としてもあまり出てこない。内容を考えてみてもそれほど舞姫という言葉・職業が重要になっているとは思えない。ならなぜタイトルが舞姫なのか、それを疑問に思い、もしかするとエリスのことを指しているのではないかと思ったので、このテーマにした。

この小説のはじめで、豊太郎は自分が変わったことを悟っている。その変わってしまった原因は色々あると思うが、最も影響を与えたのはエリスだと思う。そこで、エリスが豊太郎に与えた影響はどのようなものかを考えいきたい。

そして、その影響が豊太郎にとっては重要で、だからこそ舞姫というエリスの職業である言葉を使い、エリスのこと、ひいてはエリスと出会ってから分かれるまでのことを間接的に表しているということをいっていいと思う。

エリスとあったことでの影響ではじめに思いつくのは、豊太郎が免官されたことだろう。なので、そこから考えいこうと思う。免官された後の豊太郎は、学問が荒み、お金にも困っているが、エリスとの生活の中で「憂きが中にも楽しき月日を送りぬ」とある。憂いの中でなぜ楽しいのだろうか。これは、エリスを愛していた、ということもあると思うが、自分の意思で行動している、ということもあるように思う。豊太郎は今まで母や官長から言われたことを受動的にやってきていた。それを伯林の大学で気づき、そうとしかできなかった自分を、臆病な心の持ち主だと嘆いていた。だが、免官され、母も亡くなってしまう、一時的に指図するような人がいなくなった。相沢は仕事を斡旋して助けてはいるが、あくまでも助けであり、指図している訳ではない。こうして、受動的な行動が一時的になくなり、自分が判断し自分の意思で行動する生活が楽しかったのではないだろうか。「我が学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき」とある段落にそれを表しているように思う。そうとするなら、その切っ掛けとなったエリスとの出会いは、豊太郎に強い影響を与えたのだと言える。

出会いが強い影響を与えたのなら、別れはどうであろうか。別れるときエリスを傷つけ、狂わしてしまい、それが豊太郎にとっても深い傷となって苦しめている。「余が病は全く癒えぬ」とあることからそれが分かる。このことから、エリスとの別れも強い影響を与えていると考えられる。

以上のことから、良いものであれ、悪いものであれ、豊太郎に強い影響を与えたのだと思う。そして、舞姫というタイトルは、その影響を与えたエリスのこと、エリスとの出会いと別れを表しているのだと思う。